

## 秘めたる純情

それはたった一文字の違いだったけれども、腹立たしいぐらいに、意味が異なる言い間違いの類だと思いつながら、チカは主人が眠る寝室の窓の外、庇の上にて羽根を休めていた。

それは愚鈍さだろうか、それとも言葉に鈍感であったからだろうか、それとも愛情というものは盲目に尽きるからなのだろうか……怒りもせず、口がなさから生じた齟齬を取り繕うように訂正した主人の物煩いものわずらを、よくあることと受け入れてしまっていた人物の来訪を思い返しながら、

——それでも怒られないのですから、人徳とでも言うべきでしょうかね。

チカは物思いに耽っていた。

狭い路地の通りを往く人々が、稀に藍色の羽根に目を留めては、微笑ましそうに口元を緩ませるのを、——人間とは実に単純な生き物ですこと！ と感じながら、昨晚の出来事を振り返る。

厚顔不遜を地で行くチカの主人たるシュウが、珍しくもうなされてる姿が目に入ったのは、昨夜も大分更けてから。どちらかと云えば、明け方に近かっただろう時刻にもなつて、苦しげに吐息を洩らしては、眉根を寄せて苦悶の表情を浮かべていた。それは、夜もそれなりに過ぎた頃合に起こつたある出来事の所為だっただろう。

退屈な日常に話し相手を求めたのだろう。その日の昼間に、使者の求めに応じてイヴンがいる神殿に赴いたモニカは、ひとときの仮住まいにしていることじんまりとした煉瓦造りのコンパートメントに戻つてくる頃には、随分と思ひ詰めた様子で、無口にも食事を摂ることもせず、ただ部屋に閉じこもつて、何かを思い悩んでいる様子だった。

口喧嘩の相手の不調が気にかかつたらしいサフィーネが、体調を慮つてだろう。がさつに見えても繊細な面も持ち合わせている——とは、主人たるシュウのサフィーネ評だったけれども、胃に負担の少ないリゾットを差し入れたものの、モニカが口にしたのは一口ばかり。何かに没頭すれば、シュウも同様に食事に手を付けることすらしなくなつただけれども、モニカは違う。口に合わない食事を残すこ

とはあつても、そうした理由を明瞭りと口にしたものだつた。

それがどうだ。昨夜に至つては、口数少なくなつただ「ごめんなさい……」とだけ言葉を吐いて、食器を戻してしまつた。誰がどう見ても、明らかに趣味と違った好ましい出来事による食欲不振ではなかつた。

——何かご存知ではありませんの、シユウ様。

やけに深刻なモニカのただならぬ雰囲気に、サフイーネも珍しく焦れたようで、シユウに直接、事情を問い質しにかかつた。シユウがその事情を知つていたのかいなかつたのかは、使い魔たるチカにもわからない。けれども、知つていたとしても同じ態度を取つたに違いないシユウは、——さあ……。とだけ呟き、それ以上は話を聴く必要もないとばかりに、いつもと同じように書物をつまびらくと、自分だけの世界に没頭してしまつた。

だからこそチカは、何も見ず、何も訊かず、天井の梁にてその身を休めていたのだけれども——。

その夜半のことだつた。

チカの寢床は応接間の一角と決まっていたし、めいめいが個人のプライバシーを求めてだろう。邪神

一行とも押揃されるシユウたちであつても、そこはサフイーネを除けば元王族ばかり。彼らはそれぞれの個室に隠こもつて、ひとりの時間を過ごすか、寝室とするのが常だつた。

仲睦まじく集つていように見えても、傅かしずかれることに、また、必要以上に構われないことに慣れてしまつていゝる彼らは、他人が思つていゝる以上に群れるのを嫌がつていゝるやうに、チカには思えてならなかつた。だから、だろう。夜半に応接間まで響いてきた独り言のやうな声音が、やけに耳に障つたのは。

静かな安らぎの時間を、突如として破つたその声の持ち主がモニカであることに気付くまで、暫しの時間が必要だつたのは、その声か思つた以上に聴き取り難い大ききだつたからだ。深い睡眠に落ちていれば気付かなかつただろう声の主を求めて、チカが応接間を出てみれば、薄く開いた主人の部屋の扉から薄明かりが洩れている。

呑気で鈍感な面が目立つテリウスはさておき、シユウのことともなれば、獣以上の嗅覚を発するサフイーネが何も気付かずにいるのはおかしいと、閉ざ

された扉の向こうを窺うも、僅かな寝息も聞こえてこないのだから、恐らくは情報収集という名の遊びに出かけたのだろう。シュウはサフィーネのそうした癖を、大いに助けられている部分があるからだろう——表立って非難はしなかったけれども、快くは思っていないようで、出掛けると聞いては、僅かながらも柳眉を細めて見せたものだった。

サフィーネもそうしたシュウの本心に気付いていると見えて、夜半を過ぎ、全員が寝静まる頃を見計らって出掛けるのが習わしになっていたのだけれども、今日ばかりはそれが裏目に出てしまったのではないかと、シュウの部屋の扉の隙間から、内部を窺ったチカは思わずにいらなかった。

差し向かいで話をしていたのだったら、どれだけ心を救われただろう。チカに背中を向けているモニカは、既にベット身体を休めつつあったらしいシュウの手を取って、それは切なげな吐息を洩らしながら、その間近に顔を寄せつつ、

——元とはいえ、私わたくしとて王家の女です。

少し動けば口唇が触れ合う程度の距離にある自らの主人とモニカの頭に、そして、普段は冷静沈着な

主人の怜悯な眼差しに、ありありと浮かぶ困惑の色を見取って、チカは思わず羽根で自らの顔を隠さずにいられなかった。

——はしたない行為とはいえ、嗜みはございます。それはシュウをもつてして、幼少期に植え付けられた心理的外傷トラウマを思い出させずにいられなかったのだろう。まだ、自分が生まれていなかった頃の話とはいえ、小耳に挟んだことがある王家の風習は、チカをもつてしても口にするのを憚られる類の醜聞だったし——ましてや、王家をグラニア、或いはグラントそんごうと尊号する一般人には理解が及ばないものに違いなかった。

——好きな方と交情を交わせぬまま、嫁ぐことなど出来ません。

誰に助けを求めるときか——やはり、ここはテリウスであるべきだろうか……チカは逡巡した。王位よりも恋情を取った元王女は、邪神崇拜、そしてその換生の咎を負わされ、王位継承権を剥奪させられても尚、シュウの側に居たがった。その好意を包み隠そうともしなかったにも関わらずの気まづさは、

彼女がそれ以上の熱情をもつて、シユウと向き合っていたからに他ならない。

そして、その決意が、昼間のイヴンとの会合の内容によるものだということにも気付いてしまったからこそ。恐らくは、事情を知る貴族か王族に連なる者との縁談を勧められたのだろう。王位継承権を剥奪されたとはいえ、元王女。縁続きになつて損はないと考える輩がいない筈がない。むしろ、歳月を重ねるごとに、しとやかに、あでやかに、育ちゆく彼女を欲しがらない男がいない方がおかしかった。

———お願いします、シユウ様……。

羽根の隙間から覗き見れば、明らかに青褪めた主人の面差しがある。表情こそ冷静を努めていたけれども、平静さを欠いているのは明らかだった。

僅かにモニカが動く。

呼吸が感じられるほど端近に、その口唇が近付いた刹那、どれほどの困難にも屈強に、そして冷静に立ち向かつていった筈のシユウは、その身体を片手で振り払ったのだった。

「あなたには、慎みが足りない」

そして乱雑に立ち上がると、茫然とした表情で振り返るだけとなったモニカを尻目に部屋を出て、応

接間へと姿を消したのだ。

茫然と、それはこちらもまた青褪めた表情で、力なくシユウの部屋を後にしたモニカを、天井から見送ったチカが時間を置いて応接間に戻れば、街灯りに微かに照らし出されるソファの上で、シユウが身体を休めているのが見えた。

いつもならば、休むときであろうとも、きつちりと手足を収めてみせる几帳面な主人だったが、それは先ほどの邂逅が原因だっただろう。疲労困憊といった体で、身体を休めるために求めたのだろう。読みかけの書物を胸の上に置いて、片手をソファから崩した状態で横になっていた。

薄く開いた口唇からは、時折、呻きとも吐かない声が洩れ聴こえる……それはモニカには届いていないのだろう。チカがその部屋を覗いたとき、彼女はランブ燈明の灯りの下、声を殺して静かに涙を零していた。

———辛い想いは一緒にしように。

そう思わなくもなかったが、それを武器にしようとしたモニカの、それは女だからこそそのあさはかさだっただろう。いかに奔放なサファイアーネとて、シユ

ウに對しては忠実であつてみせたといふのに。

他人に對してはそうした性的な醜態を見せて憚らなかつたサファイーネだつたけれども、シユウにだけは冷酷に窘められるのが常だつたからだろう。女の武器を使おうとはしなかつたのだ。それを、婚姻を匂わせた上で使おうとしたモニカを、女性との性的な關係を嫌悪しているとも取れる態度が多々見受けられる性質を持つシユウがどうして許せよう。

——それでもあたくしは思つてしまふんですよ、ご主人様。わかりあえる關係の方が宜しいでしょうに。

所定の位置たる天井の梁の上に身を休め、眼下に、決して快い眠りではないだろう主人の姿を認めながら、チカは物思う。サファイーネにしても、モニカにしても年頃なのだ。盛りを過ぎてからでは益々責任を取れなくなるだろうに。ただ己の我欲の為に、使ひ続けんとするのは、決意してのこととはいへ、卑怯ではないかと。

——いえ、違いますね。わかりあえる關係でも宜しいでしょうに。

同じ過去を共有してきたからこそ、わかりあえる恥辱や汚点があるものなのだ……いかにあどけなく

も能天気映つたとしても、元王女。モニカに物煩いがないとどうして言いきれよう。その胸の内に、王家に對する憤懣を抱いていないとどうして言いきれよう。

ただの恋情だけで、肉親の情すら捨てるのは容易ではないと云うのに。

——何故なにゆえに、茨の道ばかり求められるのでしょうか。あたくしのご主人様は。

それは相手に對して、紳士淑女として慎み深くあれと、行われる教育らしかつた。伝聞調なのは、貴族の口がささい連中が、酒席で面白おかしく語つて聞かせる噂話であるからだ。

チカは、直接シユウから王家にいた時代のそういった過去について耳にしたことはない。いかな無理難題であろうとも従わずにいられない使い魔としての性は、それでもチカに、納得づくでありたいと、その過去を求めさせたけれども、それは頑なに、そして厳然としてシユウの口を閉ざさせる話題だつた。あの頃は——と無邪氣に口にできたのはモニカだけだろう。庶子として、一段低く扱われるのが当然だつたテリウスは、やはりその生活に物思うところ

があつたのだらう。モニカに話を振られなければ、そうした話題を自ら口にしなかつたし、シュウに至つては、口挟まず、ただ二人の他愛ない思ひ出話を耳に留めるだけだつた。

だからこそ、それは王家の闇に足り得るのだ。

夜の営みでの振る舞いを教え込む教育係は、幼い頃から躰に余念がないらしい。王位継承権を持つともなれば尚更だ。学問、武芸……そして、性行為に至るまで、どういつた意味であろうとも覇者たれとも云うのだろうか。先鋭的な技術力をもつても、旧態依然な風習は取り払われないと見える。

——一段低く見られる立場は、それはそれで心安いものでもあるのですよ。

いつかテリウスが、庶子ゆえのコンプレックスを口にしてみせた折に、シュウがそう言つてのけたことがある。愚鈍で実直なテリウスにとつては、それは王家という覇者たる血統からくるプレッシャーでしかないと思えていたようだつたけれども、チカにはうつつすらと察しがついた。彼らとシュウ、或いはモニカといった正当な血統の間には異なる教育が施されているのだと。

翌朝の応接間——居間としても使われているその部屋の雰囲気は、決して穏やかではなかつた。いついかなる場所でもシュウに傳くことを忘れないサフイーネは、そうした行為に対する知識が欠けている一行のために、家事全般を取り仕切っている。明け方に、コンパートメントに戻つた彼女は、応接間の変異には気付かず、そのまま部屋に戻つたらしかつた。目覚めて、いつもと同じように朝食の準備を済ませ、シュウを起こすべく、その部屋に足を踏み入れて気付いたのだらう。迷わず応接間に歩を進めて来た頃には、その騒々しさ——とはいへ、それは僅かながらに包丁の音や、コンロに火を点ける、或いは食糧庫を開いて閉じるといった物音でしかなかつただけけれども、寝てはうなされるを繰り返すシュウにとつては、騒々しい音に聴こえたに違いない。

けだるそうながらもソファに身を起こし、昨夜開き放しにしていた書物の続きを読み進めるふりをしていたものの、その不調は、サフイーネをしても直ぐに知れる様子だつた。うつつすらと目の下に浮かぶ限に、「本をお読みになられるのも、限度を過ぎては身体に障ります。どうか、ご節制を」と、どうやら書物に耽溺し過ぎての結果と思つたらしく、窘めの

言葉を吐く。それにシュウは答えずに、

「お願いがひとつあるのですが——」

頁を捲る手は動かない。

「なんなりと」

「モニカと城下にでも散歩に出て頂けないでしょうか。女性同士の方が心開くこともあるでしょう」

そして低く、凄みを感じさせる声で、

「私には——始末に負えない」

シュウの珍しい申し出に、サフィーネは心当たりがある身といえども、面食らったらしかった。やや目を開き気味にシュウの様子を窺うと、それは凄絶な表情をしていたに違いない。梁の上にて身を休めるチカには窺えなかったけれども、息を呑むサフィーネの息遣いで知れた。

「わかりました。刻限は、如何様に致しましょうか」

「出来れば夕刻まで」

本来なら数日と顔を合わせたくないに違いない。それでも変調を悟られまいとしているのだろう。捲られない頁にサフィーネは気付いていない様子だったけれども、チカは気付いていた。あれ程に没頭できる趣味たる読書ですら、今はシュウの頭の中に入

ってこないのだと。

「テリウスは如何致しましょう」

「彼にはイヴン神官の許に訪れてほしいと——」

そこに丁度、朝食を求めてだろう。「サフィーネ、もう食べてもいいかい」と、テリウスが顔を覗かせた。

「丁度いいところに」シュウはサイドテーブルに置いてあるメモ書き用の羊皮紙に、何か書き付けつつ、「イヴン神官に親書を届けて欲しいのですが」

「封筒を取って参ります」

モニカに関わる重大事と取ったのだろう。神殿から帰宅しての変調に、シュウの不調である。こうしたとき、サフィーネの機敏さは、大きな助けとなるものだ。

「返事を貰ってくればいいのか？」

大抵それらが、何がしかの返答を要するものであったからだろう。幾つもの変名を使い分けるシュウが彼らを使ってまで、直接交流を持ちたがる人間に限られていたからこそ、テリウスは即座に非常時だと思いついたようだった。「それだけ？」

「あと、出来ればセニアにも——」そこでシュウは

何事か考えを巡らせ、「止めておきましょう」

「とにかく」と言葉を継ぐ。「急ぐ必要はありません。モニカのことにはサファイアーネに任せるつもりです」

サイドテーブルの引き出しから、何枚かのクレジット紙幣を取り出すと、「気分転換に、偶にはひとりで過ごしては頂けませんか」

僅かに沈黙が流れたけれども、それは長年の付き合いあってこそその阿吽の呼吸だっただろう。テリウスは僅かに頷き、「わかったよ、シュウ」

——でもその紙幣の量は多過ぎかな。

そう付け加えて、微笑った。

「そんな話が俺の耳に届く頃には、とうに城下でユースになつてゐるだろうよ」

チカを通じて呼び立てられたマサキは、応接室でシュウと対面し、それは仏頂面で言つてのけたものだ。事情を知らないとはいえ、酷な対応だと、チカは思ひはしたものの、こうしたときには黙っておくべきことぐらいはわかっている。黙って出窓のひさしの上、伝え洩れ聴こえる言葉や、掠め見て取れる

表情を窺いながら、時折、通りを往く城下町の人々のいつもと変わらない様子を眺めていた。

「決まり事ならさしておき、ただ縁談だけが寄せられたとしたら？」

「そりゃああのお調子者のやることだろう。モテて仕方がないわ、ぐらいい言うんじゃないか？」

「成程。確かに言いそうですね」

「他の連中にはどうか知らねえけどな、俺に対してはそう出そうなんだよ、あいつは」

セニアのことである。

シュウはどうやら、王族に近い神官であるイヴンが複数の縁談の処理を進めていないか疑つていようだった。モニカとテリウスが出奔したことによつて、正当たるアルザールの血統は失われた。新王が誕生した今、それを有力者に担ぎ出されては、厄介ごとが増えるだけ——その処理を進めんとしている輩が、シュウが自らの目的の為に利用している内通者の中にもしかしたらいるのやも知れない。

けれどもそれは杞憂に過ぎるのではないか。マサキの楽観的な物言いは、チカをしてもそう思わせてならなかつたからこそ。

何せあの権勢である。ラングランの王者たるアル

ザールが血を引くセニアが飛び込んだ政治の世界は、彼女をその覇者たる立場へと押し上げた。新王誕生後においても、城下のゴシツプと云えば、セニアにまつわるものが大半を占めるほどに、彼女の人気は根強い。

「何かあったのかよ」

「恐らくはですが、モニカに縁談が無い込んだようです」

「いいんじゃないの？ 厄介払いが出来るなら、それに越したことはないだろうよ。いつまでも誰に決めない、なんてこと——」言いかけて、どうやら自分にも当てはまる話だと気付いたようだ。マサキは言葉を詰まらせると、ただ頭を掻いた。「面倒臭え」

「あなたに説教されるほど、考えていない訳ではないのですがね」

「聞かせて欲しいもんだ」

「気になりますか？」

「面倒なんだよ、女なんてのは。寄ってたかっちゃあ、きやいきやい言うだけで、一体俺のどこを見ているのかわかりやしない」

そこでシュウは何か物思ったのだろう。手前に立つマサキ手荒にを引き寄せると、出窓越しに見えな

い可能性がないにも関わらず、その口唇に口付けた。「……上手く処理できるなら、俺だって処理してる」「でしようね」背中を向けるシュウの表情は計り知れない。

「何が言いたい」

これが昨夜、モニカを跳ね除けた男のすることなのだ。普段のチカであったなら「お盛んですこと！」ぐらゐの嫌味も飛び出そうものだったけれども、今回は違う。

——私とて、王家の女です。はしたない行為とはいえ、嗜みはございます。

それは、古傷を舐め合うのであれば、同性たるマサキよりも、同じ過去を共有できるモニカこそ相応しいとチカとて思いはしたけれども、物言いが物言いだ。ただ素直に自らの恋慕を吐露してみせれば、また違った展開になっていたに違いないだろう。「嗜み」と言ったモニカの台詞は、言葉の刃と化して、確実にシュウの古傷を抉ったのだ。

「ただ恋情を騒ぎ立てるだけの女性を相手にするくらいなら」

そしてシュウはマサキを引き寄せて、その胸に自らの顔を埋めると、

「あなたで充分です」

何がそこまで、シュウを執着させるのか、チカにはわからない。当事者たるマサキにだってわかっていないのだろう。気紛れな逢瀬は、いつだって突然に、間を開けては行われるのが常だったからこそ。それでいて、互いの女性関係にまで口を挟んでみせる。

狡い、とはチカでなくとも思うだろう。

女性のそうした恋愛感情ですら利用してみせる主人の思惑は、一歩間違えれば破滅を招きかねないのだ。自らの態度だけで対処できる事態はとうに超えた。でなければ、モニカをして、どうしてあいつた行動に駆り立てるだろう。なのに、それでも尚、シュウはマサキを、マサキだけをそうした対象として手元に留めておきたがるのだ。そちらとて事情は同じようなものであるにも関わらず。

心変りがないとは、どうして思えるだろう。

マサキはシュウと同じぐらいに気まぐれであったけれども、趣味には乏しい。ひとりであることを好む性質であったけれども、それは人間関係のややこ

さしから逃れたいといったシュウの煩わしさからくる逃避とは異なり、元々が一匹狼ゆえの癖のようなものなのだろう。帰るべき家を——それは想像以上に賑やかな居所を持っている。情に厚く、正義感に強い彼が、彼女ら相手に、その情に流されない保証はないだろうに。

けれども、シュウは明瞭には言葉を吐かないのだ。「あなたでいい」不遜な言葉遣いは、王室育ちだからその習わしなのだろうか。本当に求めているのであれば、もっと違った言いようがあるに違いないだろうに——ゴシップ好きのチカだったけれども、主人のこうした遠回しな物言いや、頓着しない言葉遣いには馴染めない部分が多々あった。

それに気付いたのだろうか。身じろぎひとつせず、ただ黙ってその胸元にシュウを抱えていたマサキにシュウは、「違いますね」苦笑交じりに言い直した。

——あなたがいい。

けれども、マサキは気付かないのだ。そのささやかな言葉の違いが持つ、意味の深さの違いを。

出窓を開き放しに、ソファの上で行われる情事を、つぶさに見ていられるほど、チカとて恥を知らない生き物ではない。今日は見なければならぬものが多々あるのだ。神殿でのテリウスとイヴン神官の遣り取りしかり、サフィーネとモニカの女ならでの遣り取りしかり。そうして知らなければならぬのだ。主人が持つ、蟠りの意味を。モニカに対して、我を忘れるほどに恐れを感じた意味を。

何も語らない主人に生み出されたとはいえ、仕えているチカは語られないそれらを知らねば、言葉少なな主人の命を務められないのだから。

翼を携えているからこそその気軽さで、長くなるだろう情事を尻目に、チカは城下の空へと飛び立った。